

インディアン・サマー

2008(平成20)年3月1日鑑賞〈ホクテンザ1〉

★★★★★



監督・脚本＝ノ・ヒョジョン／出演＝パク・シニャン／イ・ミヨン／チャン・ヨン／ハン・ミョング（エスピーオー配給／2001年韓国映画／106分）

特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

……まず、はじめて観る韓流法廷ドラマに興味津々！ 韓国の法廷や弁護士
の活躍のサマは……？ 他方、この映画は弁護士と死刑囚との異色のラブス
トーリーとしても魅せるし、サスペンス性も兼ね備えているから、スリル満
点！ もっとも、映画最大のテーマは、「生きる場所」を探すこと。そして観
客のテーマは、「インディアン・サマー」の意味を理解、確認することだが
……。

インディアン・サマーとは……？

この映画のタイトルとなっている「インディアン・サマー」とは聞き馴れない言葉
だが、映画のラスト近くになってやっと、その言葉の意味が解説される。すなわちイ
ンディアン・サマーとは、晩秋から初冬にかけて一瞬訪れる穏やかで暖かい小春日和
のこと。つまり、肌寒い時期に一瞬訪れた暖かくのどかな時間のことだ。

しかして、なぜこの映画にそんなタイトルが……？ それを言っちゃあおしまいな
ので、その言葉の意味をかみしめるためにも是非あなたが目で……。

韓流法廷ドラマははじめて……？ 韓国の法廷事情は……？

アメリカでも日本でも法廷ドラマは映画の1つのジャンルだが、なぜか韓国では少
ないようで、私には記憶がなく、韓流法廷ドラマはこれがはじめて……？ この映画
では冒頭、大手(?)法律事務所に在籍する若手弁護士ソ・ジュナ(パク・シニヤ
ン)の活躍ぶりが描かれる。韓国の法廷事情や弁護士の仕事の実態を私は全然知らな
いが、この映画を観ていると、国選事件を中心に描いているからかもしれないが、日

本以上に法廷は忙しく、一丁あがり方式(?)で進んでいることがよくわかる。

ジュナは事務所からアメリカへ海外研修で派遣する人材リストに載っている、将来を嘱望される有望な弁護士。韓国では、そんな弁護士でも国選事件をたくさんやっているようで、彼が今受任したのは殺人事件の控訴審。一審は死刑判決だし、女性被告人のイ・シニョン(イ・ミヨン)は終始黙秘を貫いているとのことだから、こんな事件を受任すれば大変。ところがジュナは何ら迷うことなくこれを受任したが、海外研修へ行く前の片手間でこんな難事件が処理できるの……？

なぜ控訴審が……？

刑事事件を受任した場合、まず弁護人がやらなければならないのは被告人との面会だから、ジュナがすぐにシニョンに面会に行ったのは当然。ところがそこでビックリしたのは、シニョンから弁護人との面会を拒否されたこと。しかも、第1回公判期日でシニョンから「私は控訴していないのに、なぜ裁判が続いているの！」と叫ばれたこと。

被告人がホントに控訴していないとすれば、なぜ1審判決が確定せず、控訴審が係属しているの……？ 1審の弁護人が被告人の意思を無視して勝手に控訴したの……？ そんな疑問をはじめとして、弁護士の私の目にはこの映画の法廷シーンや裁判手続についてはいくつかの疑問があるが、この映画を楽しむにはそういう視点はしばらく横におかなければ……。

記録の薄さと検証のビデオテープにビックリ

日本では殺人事件、死刑判決事件、黙秘事件となれば、膨大な事件記録があり、そのコピーだけで厚さ30cm～50cmになるから、それを読み問題点を整理するだけで大仕事。また、この殺人事件は、シニョンが自宅の風呂場で夫を殺害したというものだから、現場検証が大きなポイントになる。また妻による夫殺しだから、その動機の解明には夫婦関係の実態解明が不可欠。したがって、弁護人が本格的に無罪を主張するのなら、「現場百回」と言われるように、現場を何度も確認することが大切だが、現実にはそれはなかなか難しい。

そんな風に考えていた私がビックリしたのは、ジュナが持っている記録がえらく薄いこと。一体捜査記録や1審での公判記録はどうなっているの……？ もう1つビッ



© 2001 Barunson Inc. All Rights Reserved.

クリしたのは、ジュナがさかんに現場検証のビデオテープをチェックしていること。韓国ではこんなビデオテープがそのまま証拠として提出されているの……？ それはともかく、そのビデオテープを何回もくり返し見ている中でジュナはある重大な事実を発見したからえらい。

ちなみに、松本清張の『霧の旗』という小説は何度かテレビドラマ化や映画化された名作だが、そこでも著名な刑事弁護士が記録を精査している中で、ある重大な事実気づくシーンがある。それは、被害者のキズの跡からみれば、被告人は右利きではなく左利きだったということだ。それと同じような価値のある大変な事実気づいたジュナは、黙秘を続けるシニョンに対してその点を執拗に問いただすとともに、弁護人として真実究明に向けて法廷で懸命の努力を続けたからすごい。後半のラブストーリーは法科大学院の教材としては不適切（？）だが、ここらの弁護人としての奮闘ぶりはまさに教材にピッタリ。

裁判官は？ 証人は？ 判決は？

韓国では控訴審（高等裁判所）の裁判官はなぜか4人。これでは意見が2つに分かれた場合どうするのだろうかと思うが、その場合は裁判長の意見が優先……？ また、証人席の配置は日本風ではなくアメリカ風だし、証人尋問の風景も弁護人や検事が証人の前まで進んで質問するスタイルが多く、アメリカ風。もっとも、アメリカと違っ

て韓国は陪審制ではないから、検事や弁護人がアピールするのは専ら4人の裁判官。

たくさんの証人尋問を中心とするすべての証拠調べを終えた後のパク・ビルジュ検事（ハン・ミヨング）の論告は、「証拠は十分。控訴審でも死刑を求刑」というものだったのは当然。これに対する弁護人の最終弁論は「有罪の立証はできていない。そんな場合は無罪が推定される」という原則論をぶったものだが、実はこれは、犯人は被告人ではない可能性が高いことを十分反対立証できたという自信の裏返し。しかし、控訴審の判決は……？ それは、事前の予想を完全に覆す無罪。こりゃ大したものだ。

後半はがぜんラブストーリー模様に……

シニョンを演じたイ・ミョンを私は『純愛中毒』（02年）、『タイフーン』（05年）、『肩ごしの恋人』（07年）で観ているが、『インディアン・サマー』の前半のイ・ミョンは地味な服装でほとんどしゃべらないから、その美しさには封印をしたまま。しかし、無罪となってはじめて外に出た時のイ・ミョンの美しさはさすが。

たまたま1度だけ外出した時に偶然ジュナと出会うという設定はいかにも出来過ぎだが、それは大目にみたうえで、暗いイメージがずっとつきまとうこの映画における唯一明るく幸せなシーンをしばし満喫しよう。もっとも、いくら無罪判決が出たとはいえ、弁護人と依頼人（刑事被告人）との男女の交際はよほど注意しなければヤバイはずだが、とにかく、後半はがぜんラブストーリー模様に。

はしゃぐのは早すぎた！

映画のストーリー展開上は、ジュナとシニョンが楽しくデートしている日がいつなのか、すなわち無罪の判決が言い渡されてから何日後なのか全然わからない。しかし、あそこまで自分の殻に閉じこもっていたシニョンが心を開いて楽しそうにジュナと語り合えるのは、かなりの日数が経っていると考えるのが自然。

他方、ジュナは弁護人として無罪判決に対して検事から上告される可能性が十分あることをシニョンに説明していたはずだし、ジュナ自身も上告期間の2週間は、それが相当気になっていたはず。ところが、この楽しい「デート」の後、検事から上告されたという話を聞き、ジュナ以上に私がビックリ。つまり、「はしゃぐのは早すぎた！」ということだ。

しかも、上告にあたっては「血痕の付着したシニョンと夫の衣類の入ったスーツケースが発見された」との情報が駆け巡ったから大変。日本で無罪判決が確定した三浦和義容疑者が、去る08年2月24日サイパンで突然逮捕されたのは新証拠が発見されたためと推測されているが、この映画では、パク検事はこの新証拠による有罪の立証に自信をもって上告したのでは……？

シニョンの居場所は……？

おっと、どうも事件の推移を少し詳しく書きすぎたようだ。映画はこの後さらに異色なサスペンス風展開に至るが、その紹介はここでは省略し、あなた自身の目で観てもらうことにしよう。ビデオテープの解明から見えてきた事実や、ジュナとシニョンの楽しいデートにおける会話から見えてくる事実は、「シニョンには居場所がない」ということだ。

ネタばれになることを恐れず少し書けば、シニョンを偏執狂的に愛していた夫は、シニョンを家から一歩も外に出させなかったから、シニョンは外の世界を全く知らず、閉所恐怖症になっていたらしい。そのため、夫を誰が殺したのかという真相は別として、夫が死亡した後シニョンがはじめてわかったのは、自分にはどこにも居場所がないという重大な事実。

この映画は、そんなシニョンの心の問題にジュナがどこまで入り込めるのか、そしてまたそれを救済することができるのかを大きなテーマとして描いているが、そりゃとてつもなく難しい作業であることは明らか。私の目には、あれほど将来を嘱望されたジュナ弁護士がここまで自分を捨ててシニョンのために尽くしているのだから、シニョンはもう少しジュナに協力すれば、と思えたが……。

なぜジュナは解任……？ なぜシニョンは……？

もう少し事件の流れを説明しなければならない。まず、上告審判決は「原判決を破棄する。事件を高裁に差し戻す」というものだった。これによって、高裁でもう1度



DVD 発売中、価格：¥5,040（税込）、
発売・販売元：エスピーオー

審理のやり直しが始まることになったわけだ。新証拠を握る検事は自信満々。そして、再度の控訴審の審理が進む中、ある日ジュナはシニョンの意思によって弁護士から降ろされてしまったからビックリ。

一体なぜジュナは解任……？ それも、ジュナが事務長（チャン・ヨン）の協力を得てかなりヤバイこと（パスポート偽造）を犯してまで、シニョンのために何かをしてやろうとしていたのに……？ ここらあたりになると、クライマックスの悲劇性を際立たせるために無理矢理脚本をつくっているのではないかと思えるほどだが、実はシニョンの生きたいと願う気持ちがそれ以上長続きしなかったということ……？

再度の控訴審における死刑判決の言渡しをジュナは傍聴席に座ってじっと聴くだけだった。ここで大切なシーンは、判決言渡し後、傍聴席のジュナが別室に入ったシニョンと、ドアが閉じられる一瞬目を合わせるシーン。それは時間的にはホンの一瞬だが、スクリーン上ではそれがスローで、しかもジュナ側からとシニョン側からの両方が映しだされるため、精一杯のメッセージを互いに届けあうことになっている。ここで、この映画の『インディアン・サマー』というタイトルを「なるほど」と理解することができるとともに、何ともやるせない気持ちに……。

2008(平成20)年3月2日記